

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520210

研究課題名(和文) 奈良・平安初期漢文書簡に見る敦煌書儀表現受容の史的展開

研究課題名(英文) historical development of Tunhuang note ceremony expression acceptance seen in Nara early Heian period letter of the Chinese classics

研究代表者

西 一夫(NISHI, Kazuo)

信州大学・学術研究院教育学系・教授

研究者番号：20422701

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、3年間の研究期間において次のような研究成果を得た。
基礎資料作成及び資料補訂領域では、これまで継続して調査してきた書簡語彙集成資料の補訂について、ほぼ全ての補訂作業を終了し、語彙集成としての精度を高めることができた。また新たに作成した書簡語彙集成資料についても検討を加えることができた。表現受容の検討及び特質解明領域では、中国の模範文と高野雑筆集の表現検討をおこない、相互の共通語彙のいくつかについて表現特質をあきらかにできた。また奈良時代と平安時代の漢文書簡の通史的検討をおこない、変遷をあきらかにできた。

研究成果の概要(英文)：It was possible to end all revision and enlargement work and raise the precision as the vocabulary compilation mostly about basic document creation and revision and enlargement of the letter vocabulary compilation material which has continued up to now by material revision and enlargement territory and has investigated. It was also possible to add consideration about the letter vocabulary compilation material made newly again. With consideration of expression acceptance and the model sentence which is China at characteristic elucidation territory, you could do expression consideration of Kouyazaxtupitusyu and do the expression characteristic clearly about some of mutual common vocabulary. You could do history-like consideration of a letter of the Chinese classics in Naraera and the Heianperiod and change clearly.

研究分野：日本文学

キーワード：書簡表現 空海 書儀・尺牘 敦煌文書 敦煌書儀 万葉集 表現受容 漢文学

1. 研究開始当初の背景

奈良・平安初期は、文学史区分では二つの時代に亘るものの文学形成の観点から見れば、漢詩・漢文が教養の礎となり、豊かな成果を生み出した時代だと言える。平仮名ではなく漢字による文学的な営為を実現するには、中国文学に対する深い造詣が求められていた。そうした中国文学の受容には、海彼への使者(遣隋使・遣唐使)や留学生・留学僧が大きな役割を果たしている。そうした人物たちの中でもとりわけ伝教大師最澄(神護景雲 1[767]-貞観 8[866])・弘法大師空海(宝龜 5[774]-承和 2[835])・慈覚大師円仁(延暦 13[794]-貞観 6[864])等は、奈良朝から平安初期へ展開する漢字を書記言語とする日本文化・文学に多大な影響を与えた。彼等の主要な業績は、いずれもが中国文化・文学を基盤として成り立ち、これを前提とした研究が積み重ねられて成果を挙げている。

そうした研究において共通する基礎資料とも称すべきなのが『高野雑筆集』と『伝教大師消息』に収められる書簡であり、円仁の『入唐求法巡礼行記』に残された在唐時の書簡である。これらの資料群は、主たる研究対象に対して補助的な立場に位置付けられていると言える。数度にわたる全集等の刊行(弘法大師全集[1910年~]、弘法大師著作全集[1968年~]、弘法大師空海全集[1983年~]、定本弘法大師全集[1991年~]、伝教大師全集[1927年~])では書簡は採録されながらも、中心は仏教文献にあった。平行して索引整備や研究と注釈が進むなか書簡は索引等の整備も行われてない現状に置かれている。

このような状況に対して、申請者は都合5年間(平成 19~20, 21~23年度)の科学研究費補助金(基盤研究(C))によって「『高野雑筆集』語彙集成」「敦煌書儀語彙集成(吉凶書儀篇)」の作成をほぼ終えることができた。これらの作成過程において『高野雑筆集』の多くの語彙が敦煌文書の書儀に見られる語彙と密接な関係にあることが明らかになった。しかも同様な現象は奈良朝の書簡にも指摘できる現象なのである。このように奈良朝から平安初期の書簡表現が、敦煌書儀の表現をどのように受容しているのかを見通すことは、これまでの受容研究や比較研究では取り上げられなかった研究領域である。

2. 研究の目的

このような背景をなしている理由として、次の三点が考えられる。

- 1 敦煌文書の資料整備と書儀研究の立ち遅れ
 - 2 受容研究の対象として書簡表現が取り上げられる機会の少なさ
 - 3 奈良・平安初期の書簡資料が表現研究の対象とされる機会の少なさ
- 第1については、発見から百年が経過し、

近年中国(俄蔵敦煌文献、国家図書館蔵敦煌遺書)・英国(英蔵敦煌社会歴史文献釋録)を中心に文書の整備が急速に進行し、その成果を活用した研究成果(趙和平『敦煌写本書儀研究』1993、同『敦煌表状箋啓書儀輯校』1997、張小豔『敦煌書儀語言研究』2007等)が陸続と公刊されている。

第2については、空海・最澄・円仁の書簡では内容事実の解明(歴史研究分野)や書式等から社会制度の実態把握(制度史分野)に主眼が置かれてきたことがあげられる。しかも研究の主目的は、仏教教理の解明にあり、事跡研究にとどまっていると言わざるをえない。つまり彼らの書簡研究(高木神元『弘法大師の書簡』1981)はこれらの研究領域の補助資料として扱われることが多かったのである。

第3については、書簡(文書)を収める正倉院文書研究は史的事実の解明が中心であり、表現研究の立場からの考察が立ち後れており、『萬葉集』の書簡も歌を解釈するために取り上げられ、主たる対象とする研究成果は僅かであった。これらの諸課題に対して、近年、表現研究・文学研究の対象として取り上げた成果が出されている(古瀬奈津子「手紙のやりとり」2005等)。

急速な状況改善のなかでも敦煌文書の公開と頒布が広く行われたのは大きな前進と位置づけられよう。これに伴い書儀研究が深まり、中国・台湾・日本の研究成果が公刊されて敦煌書儀研究の蓄積が進行(中国：周一良・趙和平『唐五代書儀研究』1995、日本：丸山裕美子「敦煌写本『月儀』『朋友書儀』と日本伝来『杜家立成雜書要略』」2009、山本孝子「僧尼書儀に関する二、三の問題」2011等)している。状況は正倉院文書も同様であり、特に奈良女子大学(21世紀COEプログラム:古代日本形成の特質解明の研究教育拠点)による成果(『正倉院文書の訓読と註釈(一)(二)』2005、2007)と桑原祐子等の成果(基盤研究(C)「正倉院文書訓読による古代言語生活の解明」2008-2010)は本研究課題と密接に関わる。

以上のような本研究課題の基盤とも言える敦煌文書研究と正倉院文書研究の蓄積は、重要な意味をもつ。つまり、奈良・平安初期の書簡表現に敦煌書儀がどのように受容されているのかを、表現の史的展開に留意して跡づけることとなり、しかも文学史上「国風暗黒時代(漢風讚美時代)」と称される当該時期の解明につながる事が期待されるからである。

3. 研究の方法

本研究課題は研究期間を3分割して3領域(A基礎資料作成及び補訂、B表現受容の検討及び特質解明、C成果発信)の内容で実施した。

【平成24年度の方法】

A基礎資料作成及び補訂

「『高野雑筆集』語彙集成」「敦煌書儀語彙集成(吉凶書儀篇)」の補訂

研究計画初年度では、これまでの研究補助金によって作業を遂行してきた「『高野雑筆

集』語彙集成」の補訂をおこなった。各種校訂本文との異同確認と異体字の調整を主な作業内容として、語彙集成の完成度を高めることとなった。この作業は引き続き遂行する奈良朝の書簡語彙集成の指標となった。

また「敦煌書儀語彙集成（吉凶書儀篇）」の補訂も併せておこなった。これまでの基礎的作業に使用してきた「吉凶書儀」の主要写本を用いて集成語彙の補訂を進めた。作業では写本のみならず、那波利貞の校訂本文（『元和新定書儀』と杜有晋の編する『吉凶書儀』とに就いて、1962）をも参照することで新たな成果があった。

「敦煌書儀語彙集成（朋友書儀篇）」本文校訂と語彙調査

これまで検討が十分ではない敦煌書儀写本の「朋友書儀」の主要写本を用いて校訂作業をおこなった。本文の確定と語彙調査を実施することによって語彙の抽出作業への基礎作業と位置づけられた。

B 表現受容の検討及び特質解明

「敦煌書儀語彙集成」の本文検討

「敦煌書儀語彙集成（朋友書儀篇）」作成に向けて本文並びに語彙検討をおこなった。近年、中国では書儀表現を研究対象とした成果（呉麗娣『唐礼雑遺—中古書儀研究』2002 等）が出され、それらを受けて書儀語の候補一覧を一部作成できた。併せて「敦煌書儀語彙集成」の本文を比較して語彙の傾向把握をおこなった。

「高野雑筆集」語彙集成」と「敦煌書儀語彙集成」との比較検討

基礎資料として補訂を実施した「高野雑筆集」語彙集成」と「敦煌書儀語彙集成」とのデータベースを活用して抽出語彙の比較検討をおこない、それぞれの特質と相違を明らかにした。

C 国際及び国内学会活動

研究の枠組みと、作成資料の検討結果について、国際学会時に研究者との交流を通して意見・アドバイスを受けることができた。また初年度の研究成果について学会発表（超域的日本語教育學國際學術研討會(台北市, 中国文化大學))をおこなった。

【平成 25 年度の方法】

A 基礎資料作成及び補訂

平成 24 年度の基礎資料作成に引き続き「奈良朝書簡語彙集成」と「敦煌書儀語彙集成」の語彙抽出並びに「平安初期漢文書簡語彙集成」の本文校訂と語彙抽出をおこなった。

で使用する史料は正倉院文書・出土木簡等と『萬葉集』の 2 つに大別される。正倉院文書・出土木簡等では、丸山裕美子の成果（『書儀の受容について 正倉院文書にみる「書儀の世界」』1996）に基づきながら、西澤奈津子の成果（基盤研究(C)「日本古代における書状の社会機能に関する研究」2003-2006）を援用して抽出と検証をおこなった。作業には公開デ

ータベース（『SOMODA』、奈良文化財研究所DB）を活用し、『萬葉集』では漢語表現や漢語の出典に特徴がある『新編日本古典文学全集』（小学館）と『新日本古典文学大系』（岩波書店）を活用し、さらに関連論文（山崎福之『萬葉集漢語考証補正(1)~(5)』2005~2011 等）をも考慮して語彙集成の素稿を作成した。として本文の校訂を終えた「朋友書儀」に基づきながら語彙抽出をおこなった。書儀の語彙は口語性が強いことから、判定基準として松尾良樹「口語語彙索引」（基盤研究(C)「敦煌文書・トルファン文書・正倉院文書の比較写本研究」2000-2002）の掲出語彙を参照した。では『高野雑筆集』語彙集成」を基準として、新たに収集した最澄と円仁の書簡表現を加え、「平安初期漢文書簡語彙集成」作成のための本文校訂と語彙抽出作業をおこなった。

B 表現受容の検討及び特質解明

作成資料に補訂を加えて表現傾向の把握を目指した。なかでも「奈良朝書簡語彙集成」では正倉院文書の検討にマイクロフィルム（影印）を用いて確認をおこなった。

「奈良朝書簡語彙集成」と「敦煌書儀語彙集成」との比較検討では、受容実態の枠組み把握を中心に検討をおこなった。「奈良朝書簡語彙集成」と「平安初期漢文書簡語彙集成」との比較検討では、史的展開のありようを具体的表現に即して一部の検証を終えた。

【平成 26 年度の方法】

A 基礎資料作成及び補訂

上記作業を踏まえて「奈良朝書簡語彙集成」「平安初期漢文書簡語彙集成」「敦煌書儀語彙集成」の補訂をおこなった。作成資料に基づきながら抽出語彙の規格を統一する等の調整作業をおこなった。

B 表現受容の検討及び特質解明

データベースを活用しながら表現の相互関係を検討した。さらに表現個々の質的な検討と考察をおこない、奈良・平安初期書簡表現の受容実態の把握をおこなった。また受容には時間差が生じ、中国文献との間には数十年のズレが存する点を考慮した。また史的展開にいかなる影響を与えているのかに留意することで、奈良・平安初期漢文書簡の表現特質と史的展開の様相の一端を浮き彫りにできた。加えて書簡表現受容の観点から奈良・平安初期に亘る「国風暗黒時代」の文学状況の一端を解明できた。

C 国際及び国内学会活動

研究の成果を国内学会（和漢比較文学会(群馬県, 群馬県立女子大学))等で発表した。

4. 研究成果

研究期間全体で解明し得た成果内容について、以下に箇条書きで示す。

(1)「高野雑筆集」語彙集成」、「奈良朝書簡語彙集成」、「平安初期漢文書簡語彙集成」、「敦煌書儀語彙集成」、「敦煌書儀語彙集成」の補訂

上記の語彙集成の語彙調査並びに補訂をひとまず終了することができた。本文校訂作業と並行して進めたため、当初は遅れが見られたが、研究期間内で整理を終えたことは大きな成果である。なお、本文に異同が生じている表現については、なお検討が必要であり、本文確定を見送った語彙が相応に存在する。

(2)各種語彙集成の比較検討

本邦書簡語彙集成と敦煌書儀語彙集成との語彙比較については、本邦語彙集成での比較検討と敦煌書儀語彙集成での一次比較検討を終えた。その上で一部資料を対象にクロスチェックを行って質的検討を実施した。

(3)各種語彙集成の質的検討

語彙集成間での比較検討の結果を踏まえて表現の質的検討を行った。その結果、書儀語彙の受容が顕著である反面、書儀語彙の流用ではなく、新たな表現創出をおこなったと考えられる表現を指摘することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計11件)

西一夫, 山上憶良の情愛—父と子—, 高岡市萬葉歴史館叢書 27: 万葉の愛, 27 巻, 21-33, 2015, 査読無

小林比出代, 左手書字での紙の置き方と字形の関係に関する分析的研究—毛筆書写と硬筆書写の比較—, 信州大学教育学部研究論集, 第8号, 61-80, 2015, 査読有

西一夫, 平安初期漢文書簡に見る汎用と独創, 2014年中国文化大学日本語文学系主催「超域的日本語教育學國際學術研討會」論文集, 135-142, 2014, 査読有

西一夫, 『萬葉集』の教材化—中学校教科書の場合—, 信大国語教育, 第24号, 23-26, 2014, 査読無

小林比出代, 左手硬筆書写における用紙の置き方と字形の関係についての試論—書写教育の観点から—, 信大国語教育, 第24号, 1-12, 2014, 査読無

小林比出代, 『SACSA』にみる南オーストラリア州での Handwriting の教育及び学習テキストに関する基礎的研究, 書写書道教育研究, 第28巻, 37-43, 2014 査読有

西一夫, 漢詩の教材研究—対比の視点から杜甫「絶句」を読む—, 信大国語教育, 第23号, 23-26, 2014, 査読無

西一夫, 書儀・尺牘表現の受容—平安初期漢文書簡の表現を中心に—, 信大国語教育, 第22号, 1-8, 2013, 査読無

小林比出代, 書写から書道へのつながりについて—書写と書道との関連性はどこにあるか—, 書写書道教育研究, 第27巻, 131-136, 2013, 査読有

小林比出代, 平仮名「はね」の難易度と児童の発達段階—学習教材開発のための基礎研究—, 書写書道教育研究, 第27巻, 79-83, 2013, 査読有

小林比出代, 小学校書写用教科書(第1学年)における平仮名での「はね」の扱いに関する一考察, 書写書道教育研究, 第27巻, 31-39, 2013, 査読有

〔学会発表〕(計8件)

西一夫, 「藩文庫」の漢籍資料について, 「信州教育」関連史料群の整備・公開と質的特徴の解明—信州諸藩の藩校図書と顕彰碑の調査— 成果報告会, 2015.3.29, 長野(信州大学)

小林比出代, 南オーストラリア州での Handwriting の学習テキストが日本の書写教育に示唆する要素, 第29回全国大学書写書道教育学会, 2014.10.12, 埼玉(埼玉大学)

西一夫, 空海書簡に見る書儀表現の受容, 第33回和漢比較文学学会大会, 2014.9.21, 群馬(群馬県立女子大学)

西一夫, 山上憶良の情愛—父と子—, 高岡市萬葉歴史館夏期セミナー, 2014.8.30, 富山(高岡市萬葉歴史館)

西一夫, 平安初期漢文書簡に見る汎用と独創, 超域的日本語教育學國際學術研討會, 2014.5.10, 台湾

小林比出代, 『SACSA』にみる南オーストラリア州での Handwriting の教育及び学習テキストの分析, 第28回全国大学書写書道教育学会, 2013.10.6, 群馬(群馬大学)

西一夫, 平安初期漢文書簡にみる書儀・尺得表現の受容, 超域的日本語教育學國際學術研討會, 2013.5.18, 台湾

小林比出代, 平仮名での「はね」が再現できる発達段階—学習教材開発のための基礎研究—, 第27回全国大学書写書道教育学会, 2012.10.7, 京都(京都教育大学)

〔図書〕(計1件)

島津忠夫・井上宗雄・有吉保・西一夫他 475名, 和歌文学大辞典(冊子版), 1339, 古典ライブラリー, 2014

6. 研究組織

(1)研究代表者

西一夫(NISHI, Kazuo)

信州大学・学術研究院教育学系・教授
研究者番号: 20422701

(2)研究分担者

小林比出代(KOBAYASHI, Hideyo)

信州大学・学術研究院教育学系・准教授
研究者番号: 10631187

(3)連携研究者

なし